

法圓寺の黄金天神・愛宕大権現・秋葉三尺坊大権現のこと

【黄金天神(おうごんてんじん) (宮嶋天神)】



天神様あるいは、天満天神、天満大自在天神は菅原道真公が神格化して、学問の神様として、広く信仰されております。近江の国の「北の天満宮」、九州「太宰府天満宮」は有名ですが、法圓寺にお祀りしてあります天神様は通称『黄金天神』あるいは『宮嶋天神』としたしまれ、不思議の縁により當法圓寺に祀られ、古くから人々の信仰を集めておりました。

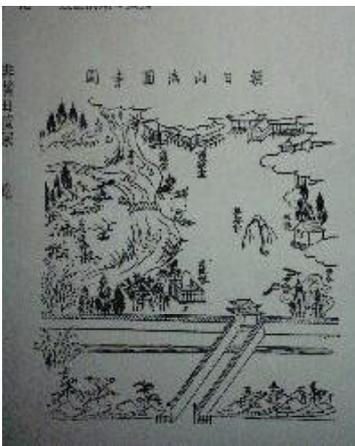
この天神様の縁起を紹介するものとして、元禄9年（一六九六）芭蕉の甥の天野桃隣が出しました俳諧集『むつちどり』にも次のように記載されております。

「是れより段々出 桑折に着く。田村何某の方に休息。仙台領宮嶋の沖より黄金天神の尊像、漁夫引き上げ、不思議の縁により此処へ遷らせたまひ、則、朝日山法圓寺に安置したてまつる。忽ちの御奇瑞に諸人拳つて詣づ。まこと所は辺土ながら、風雅に志す輩

過半あり。げに土地清浄にして、人心柔和なるを、神も感通ありて鎮座したもうとは見えたり。農業はいうに及ばず文筆の嗜みにあいて、桑折にとどめぬ。

天神社造立半

「石突に雨は止たり花拓」



とありますように、法圓寺の黄金天神は元禄時代にはすでにお祀りされており、文化の守護神として、あるいは、雷神として、人々の信仰帰依を得ていたようです。

享保4年（1719）に出されました俳諧集『田植塚』にもその当時の法圓寺の境内図が描かれてありますが、そこには梅の古木と蓮池と『宮嶋天神宮』が描かれております。



天神様の本地佛は『十一面観世音菩薩』であります。現在、法圓寺には黄金天神さまの御導きにより、この天神様の本地佛として、総本山長谷寺所縁の『十一面観世音菩薩』像一体（恩師栗山明憲大和上から特別に頂戴いたしました）が法圓寺の本堂に勧請しております。

【秋葉三尺坊大権現(あきはさんじゃくぼうだいごんげん)】



秋葉三尺坊大権現が法圓寺に勧請されたのはおそらく愛宕大権現と同じ頃で文化十一年（1814）であろうと思われます。爾来、今日まで火伏せの神として御守護を賜っております。

秋葉信仰は、静岡県周智郡秋葉山の神から起こりました。秋葉神社の『火之迦具土神(ひのかぐつちのかみ)』を祭神とし、秋葉神社境内に『三尺坊大権現』を祀る「火伏せ」の信仰です。法圓寺の秋葉大権現はご神体が白狐に乗り、飛行自在となって田子の浦を巡る加納坊という修験者が不動明王の三昧に入った姿となり、靈験のあらたかな大権現として秋葉の神を鎮守する使命を賜ったと伝えられています。秋葉三尺坊大権現は、江戸時代に全国に「火伏せの神」として広く信仰されました。

この故に秋葉様の本地佛は『大聖不動明王』であります。

【愛宕大権現(あたごだいごんげん)】



愛宕大権現は京都西北にある愛宕山の雷神・防火に守護神ですが、法圓寺の愛宕大権現様は【文化十一年（1814）十一月三日。法圓寺十一世 宥精和尚が勧請】と銘記されています。

ご神体は白馬にまたがった美男の「將軍地蔵尊」でとして、武士の信仰が厚かったようです。

祭神は『火産靈神』という火の神様です。防火・火伏せや疫病除けの神として信仰されてきました。本地佛は『將軍地蔵尊』他五尊で、愛宕山朝日峯白雲寺にお祀りされています。法圓寺の山号が朝日山というのもいささか関係があるかもしれません。

【法圓寺の「隠れキリシタン『マリア観音』石像】



法圓寺の隠れキリシタン『マリア観音』は写真三体の石塚のうちの左。中央は『雷神』。右は『古峰ヶ原』です。

法圓寺の隠れキリシタン『マリア観音』については当時、立教大学学長高田茂先生の『石のマリア観音耶蘇佛の研究』のなかで詳しく紹介されています。

参照民報サロン記事:『黙する石が語り出すとき』(好久)

境内の天神堂側の一角に自然石が一基祀られておりそれが何であるか長いこと不明であった。隣には「雷神」と刻まれた石碑があるが、自然石の方には文字も図像もなく、それが何であるかは知る由もない。ただ、昔から「これは隠れキリシタンのマリア観音でね。ある時間になると子供を抱いた観音さまが現れる」と古老からよく聞かされていて、子供心に興味を覚え、一日中じっと眺めていたこともしばしばであった。

しかし、何となく全体が赤子抱いた姿のように見えるが、ただのごつごつした岩でしかなかった。

最近、隠れキリシタンの研究をしているという方が突然訪ね来られた。

あいにく確証する資料は何もなく申し訳ないと思っていると、逆に桑折町に隠れキリシタンが存在していたことを裏付ける米沢藩上杉文書の資料や立教大学高田茂教

授の『石の MARIA 観音 耶蘇佛の研究』などの貴重な資料をたくさん頂戴した。その中で、法圓寺の自然石が MARIA 観音であると紹介されている。

桑折には半田銀山があり、奥州・羽州街道の分岐点であるので、かなり多くの隠れキリシタンが移り住んでいた。

元和年間の徳川幕府によるキリシタン禁教令や追放令はきわめて過酷なものであった。処刑された者は数限りなく、奥羽に逃れた隠れキリシタンも転びキリシタンとして子供や孫たち六代に及ぶまで差別されてきた。それは世界史上まれにみる弾圧と殉教の歴史でもあったと研究者達は語る。

今日でも、殉教者と称する者たちの痛ましくも激しい行動は世界中を震撼させる。それはともかく、なぜ、この寺に自然石の MARIA 観音が祀られたのであろうか。この寺に「天神」や「雷神」や「観音」が祀られてあり、それが「天にまします神」や「ゼウス」や「聖母 MARIA」を隠れて信仰するにはちょうどよかったからなのであろうか。

突然の来訪者に触発されて、夕日が沈む頃まで、じつとこの自然石 MARIA 観音を見ついていた。相変わらず寡黙な石ではあるが、ふと、こんな声が聞こえた。

「それは悲惨なものでしたよ。同じ血の通った人間同士が信仰や立場の違いでお互いを疑ったり、争ったり、殺したりするのですからね。こんな悲しい光景はありません。何故人をしてこんなに狂わしめるものなのか。ほら、耳を澄ましてご覧なさい。

聞こえてきませんか。大勢の人々の悲痛な叫び声が。攻める者も攻められる者も、信ずる者も信ぜざる者もみな同じく悲しみもがき苦しんでいるその嘆き哀しみの声が……誰もがかげがえのないのちを頂戴しているというのに、どうして人々は我見妄見の利害や主張にこだわって争うのでしょうか。私はこれまでずっと人類の愚かな悲しみと苦しみの声を黙って聞き続けてきました。本当に悲しいことです。」

江戸時代に建立された MARIA 観音。実はあまりにも凄惨な宗教弾圧を見かねたこの地の人々の、同じ人間として、本当の救いの神は見えないところで一であり、この世でみな俱に共生すべく生き延びよという大慈大悲の思いが込められているように思えてならない。

どうやら、この自然石は、今、世界に向けて、長い沈黙を破り、人類の悲しみの歴史を少しずつ語り始めてきたのかも知れない。愚かさを繰り返さないようにと……

【新発見！天満宮・秋葉山・愛宕山のご本尊をお祀りする厨子の二種類の紋章はキリシタン信仰を暗示していた】



朝、秋葉山の権現堂に入りお参りをしている、ふと、これは一体何の紋であろうかと気になった。それまで、全く、気にせずにした

ものだった。寺の古老達も全くこれについては教えてくれるものもなかったのです。



この紋は、これは単に飾り金具としてこれまで誰も気にしていないものでしたが、不思議に厨子中心の天地に打ち込んであります。拝んでいて、不思議でならないのは、この神々しさは圧倒的な光であるようにみえるのです。

そこで調べますと、

なんと、紋は「大村日足紋」すなわち太陽神であります。この紋は北九州地方に古くから見られる紋なので、キリシタンに間違いないと推量します。最初のキリシタン大村忠純の流れを汲むものがこの厨子をいわゆる「天満宮」を「神を祀るお宮」として厨子を奉納し、密かにキリシタン信仰をしていたことが窺えます。



この紋はこの厨子の開き扉にはめられている。小さい頃から拝んでいて、なんとも思わないできていたが、ふと、◆が三つあるのはどうしてか。

調べると、この【膝紋】といわれ○内に描かれている。神社仏閣では縁結び結縁のご加護を祈る紋であつたらしい。しかし、この紋の発祥地はやはり北九州地方に見られる紋である。

これは三角四面体（マカバ◆）が三つつながっていることを示している。すなわち。「三位一体」を象徴しているのである。これは「天神様と愛宕様と秋葉様の三つの神様の一体化」と見えて、実はキリシタンの「三位一体」の信仰が隠されていると推量されます。この三部大権現の納められてい立派な宮殿を建立奉納された方々は隠れキリシタンに関わる人たちであつたのかも知れないと推量しています。

【天神さまと牛】



天神様（菅原道真公）と牛の信仰は日本の伝統的な信仰で、非常に深い関係があります。以下にその詳細を説明します。

1、菅原道真公と牛の関係

菅原道真公は平安時代の承和12年（845年）乙丑（きのとうし）6月25日に生まれました。その生涯を通じて牛を愛されていたことや、無実の罪で大宰府へ左遷される道中、藤原時平が差し向けた追手に囲まれ、窮地の事態に陥った時に白牛がやってきて刺客を退け、道真公を救ったとの伝承も残っています。

2、牛の神使としての役割

牛は「神使（しんし）」と称され、神様をお守りするだけでなく、時には神様の意志の代弁者となり、神様の世界と我々の世界を行き来するといわれています。全国の天満宮で信仰されている神使といえば、牛です。

3、牛の像と信仰

天神信仰の中には、史実や縁起、あるいは伝承を通じて数多くの「天神さまと牛」の関係が伝えられています。そのため、天満宮においては牛は神の使いとして信仰の対象となり、境内各所に牛の像が置かれています。

4、撫で牛

牛の像は「撫で牛」と言って、いつの頃からか撫でることでご利益を与えてくれるありがたい存在として崇められるようになりました。「学問の神様」である道真公の御神徳が授かると云われております。

5、天神様の正式な神号「天満大自在天神」の由来とされる仏教の守護神「大自在天」は白牛に乗っています。

以上のように、天神様と牛の信仰は日本の伝統文化の一部であり、その信仰は今日でも続いています。

